The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ネパールの医療事情を見聞して
Author(s)	久村, 理恵
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1997, 3(1), p. 59-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56707
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ネパールの医療事情を見聞して

久 村 理 恵*

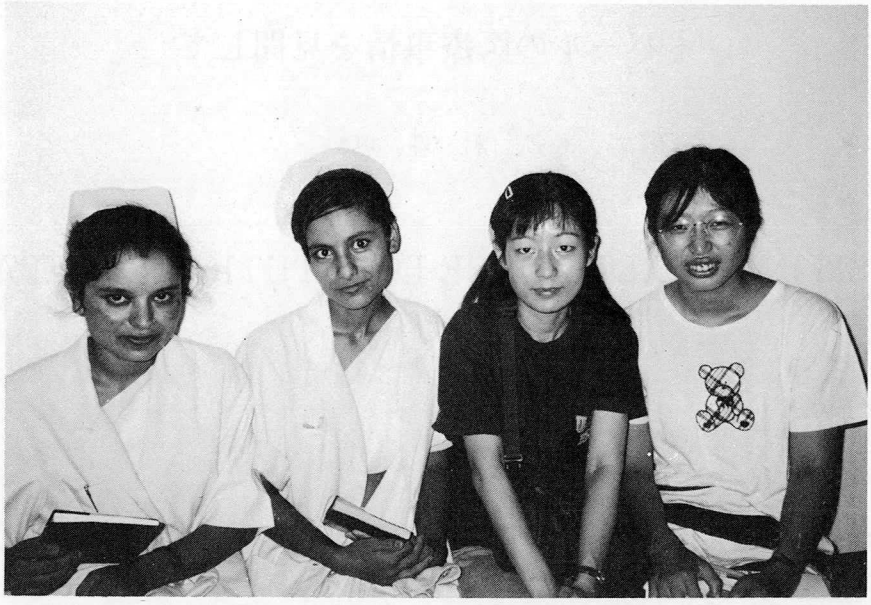
VISITING HEALTH CARE INSTITUTION IN NEPAL

R. Kumura

1996年の夏、私はアジアの大きなNGO団体の一つであるAMDA-NepalのStudent tourに参加し、難民キャンプの様子、ネパールでの医療・衛生システムやその現状などに直接触れる機会を持つことができ、そこに潜在する様々な問題を感じさせられて日本に帰ってくることになった。

まず私達はネパールの南にあるダマックに飛んだ。そこにはブータン難民キャンプがある。空港から車にゆられて、濁流が暴走している橋の上を渡り、人家の影も見ずネパールの田舎を延々3時間、私達はやっと難民キャンプに着くことができた。そして私達の車をみるなりどこからともなく湧いてくる人・人・人……。子供の姿が多い。無論言葉は通じないがニコニコしてこちらを指差している。少し交流を図ってみようかと、国際空港で会ったネパリーに教えてもらったネパール語を話してみた。“Mero Nam Rie Kumura Ho” 途端に湧き上がる歓声の渦！　笑顔の波！　たったこれだけしか会話できなかったのだが、私達は充分楽しい時間を共有できたと思う。ネパールに着いて早々に触れたこのキャンプでは、思っていたよりも良い保健活動が行われており、私達をいい意味で驚かせてくれた。保健活動のメイン・プロジェクトはやはり家族計画で、それについては一人の人がいつくことのないボランティアに対して専門的な教育を行うシステムがあり、人が変わっても継続して良いサービスを提供できるようになっている。コンドームもいつでも取りやすいように外に箱にいれて無料で配っていた。こんな所でも人権は守られている。次に大きなプロジェクトは母子保健・小児保健であり栄養補給支援、小

＊大阪大学医学部保健学科看護学専攻



児専用の診察、予防接種などがつつがなく行われる。ここは医療行為以外はsave the childrenというNGOが救援活動を行っており、その為か小児関係は他より充実しているように思えた。

ネパールでは難民キャンプの他、AMDA-Nepalの病院やカトマンドゥにあるJICA資本で建てられたトリブバン大学病院、カンティ子供病院、障害者センター、プライマリーの第一次医療にあたる保健所的役割のヘルスポストなどの施設を見学した。総じて言えることは清潔・不潔の観念が少ないことだ。病院でさえ膿のついた乾綿を平気で窓から外に投げ捨てていたし、ヘルスポストの裏には医療廃棄物が散在していた。AMDA病院でもディスポの手袋を洗って何回も使ったり、手術のシーツも血の付いたまま次の患者に使う。これは意識上の問題であり、教育の普及率に関係していると思う。ネパールでの識字率は約40％であり、ヘルスポストの衛生教育にも絵本様のものや、一目見て何が言いたいか分かるポスターが目立っていた。教育制度は整えられてきつつあるが、まだまだ数も足りない。また親の教育への意識が低い為と家計が厳しい為に、子供を学校に行かせないという現状もある。教育が普及し、衛生的になるにはまず国家の経済安定がなによりも先決であるように思えた。ネパールはアジア最貧国といわれている。ストリートチルドレンなど問題を挙げればきりがない。しかしそこには青い青い空が広がっていて、生きることに純粋な人々の姿があった。この空の澄んだ青さは生涯私の胸に残るだろう。ネパールには眼科疾患が多く、この青い空を見れない人がたくさんいるということはなんて残念なことだろうと私は深く思う。